

敬うもののある暮らし

— 儀式の大切さ —

お盆が近づくと、今からもう半世紀以上前のふるさとの精霊流しの光景を思い起こします。私が二歳の時、祖父が亡くなり、その夏に初盆を迎えたのでした。当時ふるさとは、一家の主が亡くなると、初盆に船を造って御霊を送るという風習がありました。船には灯籠やちょうちんなどを飾って、熊野川の川原まで引いてゆきます。そこでみんな手を合わせてお見送りをするのです。

夕暮れの頃、あちらこちらで送り火が焚

かれ、お坊さんの読経の声も聞こえていました。船に手を合わせていると、母が、祖父はこの船に乗ってあちらの世界に帰ってゆくのだと教えてくれました。

ところが、その船は専門の船大工の造ったものではなかったため、私たちの見ている目の前で沈んでしまいました。私はその時まだ二歳でしたが、祖父はいつたどこに行くのだろうかと大きな疑問を抱きました。三つ子の魂百までと申しますが、人は死んでいった



敬

円覚 南 庵

円覚342号 目次

横田管長のお話

「敬うもののある暮らし — 儀式の大切さ —」…………… 1

管長のページ…………… 8

信心ことはじめ④…………… 10

鈴木大拙の言葉と生涯(11) / 蓮沼 直應…………… 12

〇〇〇〇〇〇 / 桜井 竜生…………… 16

円覚寺の至宝⑦…………… 20

精進料理レシピ / 藤川 譲治…………… 22

施餓鬼会〜お施餓鬼〜 / 横山友宏・由馨…………… 24

表紙・裏表紙写真 / 円覚寺派宗務本所

いどこに行くのかということが私にとって生涯を貫く大問題となったのでした。

小学生の頃には、親しくしていた友人が白血病で亡くなりました。当時は同級生が亡くなるとは夢にも思っていませんでした。そうして死の問題は私にとって抜き差しならぬものとなったのです。

そんな中で、お寺に行つて坐禅をしました。まだ十歳でありました。そのお寺が清閑院という臨済宗のお寺であり、初めて坐禅を教わったのが当時住職であつた後藤牧宗和尚でした。

お寺の坐禅会には、由良町興国寺から目黒絶海老師がお見えになつてお話をしてくださっていました。この老師のお姿に接して、私は子ども心に、この禅の道に死の問題を解決する道があると思つたのです。老師

の洒脱な風貌、立ち居振る舞い、とりわけ仏前に焼香して恭しく三拝なされるお姿に感動しました。

当時学校の先生は偉いものであり、尊敬すべきものと思つていました。そしてお寺の和尚もまたそれ以上に偉く尊敬すべきと思つていました。清閑院の和尚は、学校の先生もなさつていたので、幼い私にとってはこれ以上ない尊い方でした。

ところが、禅の老大師と呼ばれる方がお見えになると、その和尚が実に平身低頭してお出迎えをしたのです。私はそのお姿にも感動しました。そうして、いつも偉い方だと思つていらっしゃる方よりもっとお偉い方がいらっしゃるのだと知つたのです。そして、そのもっとお偉い老師は、仏様の前で、実に丁寧に心を込めて礼拝されていたのです。

心から敬うものをもっている

姿は美しいと思ひました。こういう世界は素晴らしいと感動しました。私がこの禅の道を学んでみようと思つたのは、そんな出会いがもととなっているのです。

そして絶海老師がお話を始められると、「今日ここにお集まりの皆さんは仏様です」といって手を合わせて拝まれました。偉いと思つていた和尚より、もっとお偉い老師が手を合わせて拝まれたのは、なんと私たちだったのです。これはいったいどういうことなのか、大きな疑問となつて坐禅を始めたのでした。

以来半世紀近い歳月をかけて



坐禅してきて、なるほど老師の仰った通りだというのが結論であります。

森信三先生の言葉に、「尊敬する人が無くなった時、その人の進歩は止まる。尊敬する対象が、年と共にはっきりして来るようであれば、真の大成は期し難い」というのがございます。

常に敬うものをもっている暮らしというのは尊いものだと思います。私の両親は特別の信仰をもっていたわけではありませんが、毎朝ご飯を炊くとお仏壇に供えて手を合わせていました。神棚もお祀りしていました。お彼岸やお盆、月命日など折にふれてお墓参りも欠かしませんでした。手を合わせ敬うものをもっている暮らしの中にあっただけでした。

この頃はどうかでありましょうか。学校の先生は、尊敬されているでしょうか。敬われていることもあると思いますが、昨今のモンスターペアレントなる言葉を聞くと、敬うことから遠くなっているのではと懸念します。お寺の和尚はどうでしょうか。敬ってくださる方も多いとは思いますが、色々と批判されることもあろうかと察します。

もちろんのこと、批判されるべきことは謙虚に反省すべきですが、敬う心まですぐ失われるとしたら、残念な気がしています。

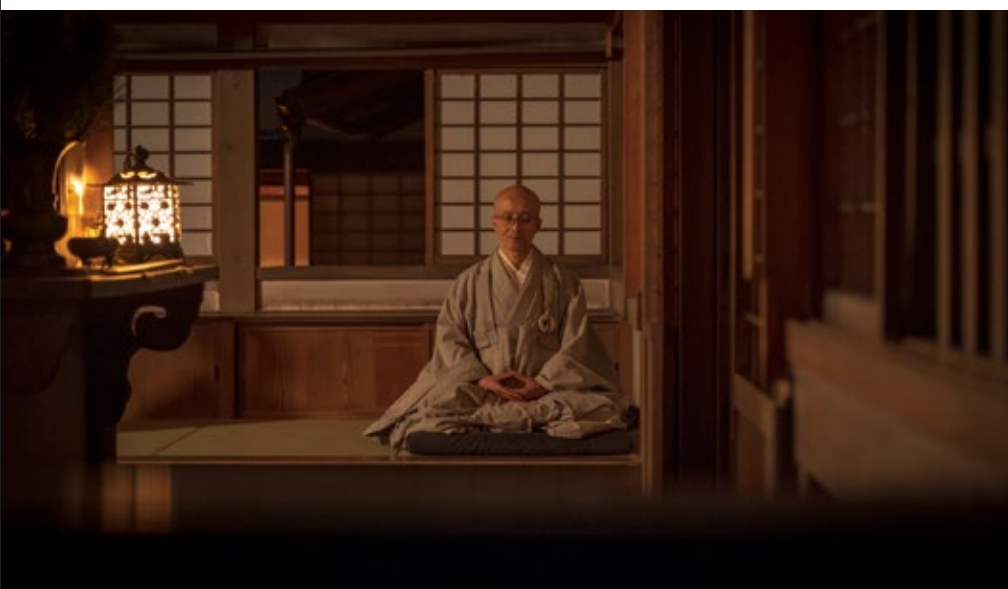
京都にある花園大学に通うようになって早くも六年が経ちます。総長という職をいただいています。大学の実務は経験豊富な学長が担ってくれているのです。ただいま

は磯田文雄学長であります。磯田学長と話をしている、ある時に儀式の大切さについて語り合いました。卒業式の時だったかと思っています。

磯田学長は、東京大学を卒業されて文部省にお勤めになっていた方です。その磯田学長から興味深い話をうかがいました。

なんでも東大では一時期入学式や卒業式がなかったのだそうです。東大で学園紛争が起きて、昭和四十四年一月安田講堂を学生たちが占拠し、さらに警視庁が封鎖を解除したのです。

学生たちが立てこもっていた講堂は使える状態ではなくなり、入学式も卒業式も開催されなかったというのです。入学式は六年後に武道館で再開されたのですが、卒業式はなんと平成三年に再開されるまで二十



年以上にわたって挙行されなかったとうかがいました。

しかし、それでもやはり入学式、卒業式という儀式は大切だということになったのです。磯田学長からいただいたご著書『教育行政』（ミネルヴァ書房）には、「各学校で実践されている音楽祭、文化祭、体育祭、さまざまな体験活動、特別活動、これらは秘儀化機能の回復という観点から見ても大いに教育的意義がある。子ども達は社会との関係において、他者とのかわりにおいて自分の価値を見出し、自分の顔を獲得していくのである」と書かれています。いろんな儀式を通じて人間はお互いのアイデンティティーを確かめ合うのであります。

コロナ禍の間には、文化祭や体育祭など儀式を行うのが難しい時がありました。入

学式や卒業式も色々対策を取らなければなりませんでした。しかし、決して無くてもいいということにはなりませんでした。

そこで磯田学長が私に言われたのが「人生で一番大切な儀式は葬儀ではありませんか。この葬儀を軽んじることがあつてはならないではありませんか」ということでありました。

コロナ禍の間にお亡くなりになった時には十分なお葬儀をできなかったのはやむを得ないことです。それでも、その時できる限りのことを務めたはずであります。

身内だけのお別れ会というのも増えているのかも知れませんが、お寺の和尚をお招きしてお勤めすることにも大きな意義があります。和尚を敬ってお招きする姿がまた尊いものであります。そんな姿が子どもた

ちにも良い影響を与えると信じます。

お寺の行事も簡略化が進みました。やむを得ない事情もあろうかと思えます。儀式に導師をお迎えする和尚の姿には尊いものがあります。そして、お寺の儀式は仏様や亡くなった方を敬う場です。私は幼い頃、そんな心から敬うものを持つている和尚の姿に感動してこの道に入りました。「尊敬する人が無くなった時、その人の進歩は止まる」の一言を胸に刻みます。

もっとも絶海老師が「みんなが仏様です」と拝まれたように、総ての人を敬うことができたなら、それこそ真の仏様なのであります。

お盆を迎えます。心から敬う気持ちを持ってご先祖をお迎えしましょう。そして和尚がお参りくださる処では、どうか丁寧にお迎えをしてください。

